

# 岡田遺跡発掘調査報告

2010（平成22）年3月

三重県埋蔵文化財センター









調査区全景（東から）



調査区全景（南から）





SK 7 遺物出土状況（北から）



SK 7 東壁面たちわり（南から）



SK 7 西壁面たちわり（南から）



SK 7 南壁面たちわり（西から）



SK 7 掘削状況（東から）



# 序

本書で報告する岡田遺跡は、鈴鹿市竹野町に位置し、鈴鹿川流域の独立丘陵上に立地しています。丘陵上や下に広がる平野は人々の生活の場として長らく利用され、縄文時代以降の遺跡が多数存在しています。これらの遺跡は、我々の祖先が辿った長い歴史のほんの1コマを表しているに過ぎないかもしれません。しかし、この1コマの積み重ねが歴史であり、どれ1つ欠くことのできない、かけがえの無い歴史遺産と言えます。

今回報告するのは、鈴鹿市に所在する岡田遺跡の発掘調査の記録です。本書が、郷土に残された貴重な歴史遺産を未来に伝える一助となれば幸いと存じます。なお、末筆ながら、現地調査や報告書作成に際し、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた多くの関係者の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

2010（平成22）年3月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 河北 秀実



## 例　言

- 1 本書は三重県鈴鹿市竹野町に所在する岡田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は経営体育成基盤整備事業鈴鹿川沿岸3期に伴って行われたものであり、調査にかかる費用は三重県農水商工部が負担した。
- 3 発掘調査は三重県教育委員会を調査主体とし、下記の体制で実施した。

調査担当　三重県埋蔵文化財センター  
調査研究Ⅰ課　主査　小濱　学  
＊現地調査については、四日市農水商工環境事務所からの労務提供による。
- 4 本書の執筆・編集は小濱学が行った。
- 5 現地における発掘調査や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、地元の方々をはじめ、鈴鹿市教育委員会、四日市農水商工環境事務所にご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。
- 6 本書で報告した岡田遺跡に関する調査記録および出土遺物などは、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。
- 7 本書で示す方位は、座標北を用いた。座標は世界測地系2000を用いた。
- 8 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

S K：土坑・土師器焼成坑　　S D：溝　　Pit：柱穴・小穴
- 9 本書で使用する用語は、以下に統一している。

たかつき：高杯　　つぼ：壺　　わん：椀　　なべ：鍋
- 10 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(21版、日本色研事業株式会社、1998年)に準拠した。
- 11 挿図と写真図版の遺物番号は相互に対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。



## 目 次

I 前 言	· · · · ·	1
II 位置と環境	· · · · ·	4
III 遺 構	· · · · ·	6
IV 遺 物	· · · · ·	16
V 自然科学分析	· · · · ·	18
VI 結 語	· · · · ·	23

## 挿図目次

第1図 遺跡地形図及び調査区位置図 ······	2
第2図 岡田遺跡の周辺遺跡 ······	5
第3図 地区割図 ······	6
第4図 土層断面図 1 ······	7
第5図 土層断面図 2 ······	8
第6図 遺構平面図 1 ······	9
第7図 遺構平面図 2 ······	10
第8図 遺構平面図 3 ······	11
第9図 遺構平面図 4 ······	12
第10図 遺構平面図 5 ······	13
第11図 遺構平面図 6 ······	14
第12図 SK 7 平面図・断面図 ······	15
第13図 出土遺物実測図 ······	17
第14図 暦年較正年代グラフ（参考） ······	20

## 写真図版目次

卷頭写真	調査区全景	SK 7 遺物出土状況 ······	29
	調査区全景	写真図版 8 SK 7 遺物出土状況 ······	30
	SK 7 遺物出土状況、たちわり	SK 7 完掘状況 ······	30
写真図版 1	調査前状況 ······	写真図版 9 SK 7 完掘状況 ······	31
	調査前状況 ······	SK 13 完掘状況 ······	31
写真図版 2	調査区全景 ······	写真図版 10 SK 11 及び 15 完掘状況 ······	32
	調査区全景 ······	SD 8 及び 10 完掘状況 ······	32
写真図版 3	調査区東側調査状況 ······	写真図版 11 SD 14 遺物出土状況 ······	33
	調査区全景 ······	SD 21 完掘状況 ······	33
写真図版 4	調査区全景 ······	写真図版 12 SK 19 完掘状況 ······	34
	調査区全景 ······	SK 18 完掘状況 ······	34
写真図版 5	SD 2 完掘状況 ······	写真図版 13 SK 23 完掘状況 ······	35
	SD 3 完掘状況 ······	調査後の状況 ······	35
写真図版 6	SK 5 完掘状況 ······	写真図版 14 出土遺物 1 ······	36
	SK 4 完掘状況 ······	写真図版 15 出土遺物 2 ······	37
写真図版 7	SK 7 遺物出土状況 ······	写真図版 16 炭化材 ······	38

## 表目次

第1表 測定結果と暦年較正 ······	19
----------------------	----

# I 前言

## 1 調査に至る経緯

鈴鹿川沿岸に、三重県農水商工部が経営体育成基盤整備事業を計画し、その事業地内に埋蔵文化財の存在が確認された。それにより埋蔵文化財保護と事業との均衡をはかりつつ、三重県埋蔵文化財センターは三重県農水商工部との調整を続けてきた。調整の結果、遺跡内の事業が工事の都合上やむをえない場合に、事前に発掘調査を行い記録保存に務めることとなった。近年においては、鈴鹿川沿岸流域で展開してきた経営体基盤育成整備事業により、大木ノ輪遺跡第2次調査、上箕田遺跡第7次調査、野辺遺跡範囲確認調査、岡部氏館跡範囲確認調査が断続的に行われてきた。それらの一つとして、岡田遺跡においても平成20年度に発掘調査を行い、記録保存に務めた。

## 2 調査の体制

2008(平成20)年度

現地調査

調査研究I課 主査 小瀬学

2009(平成21)年度

整理作業

調査研究I課 主幹 田中久生

## 3 調査の方法

### (1) 調査経過の概要

範囲確認調査(平成20年度)

現況は道路である。12箇所の範囲確認調査坑を設定した。複数の調査坑において、地表下30~80cmで土師器片、陶器片が確認することができた。

本調査(平成20年度)

現地調査は、10月1日から開始した。現況が道路であるため交通量が多く、安全の管理や確保が重要な課題となった。遺構としては、多くの土坑や溝が確認できたが、その中でも土師器焼成坑は特筆できる。遺物については、弥生土器から陶器の出土を確認することができた。11月5日には現地調査を終

了した。

### (2) 調査日誌(抄)

2008(平成20)年10月1日(水)

- ・ 国土座標基準点設置及び水準点移動。

2008(平成20)年10月7日(火)

- ・ 三重県埋蔵文化財センター、四日市農水商工環境事務所、受託業者と現地協議を行う。

2008(平成20)年10月16日(木)

- ・ 三重県埋蔵文化財センター、受託業者と現地協議を行う。

2008(平成20)年10月21日(火)

- ・ アスファルト除去及び表土掘削、東西方向の調査区東端から開始。
- ・ 現況地盤から90~100cm掘削後、土坑、溝確認(SK1・4・5、SD2・3)を確認。
- ・ SK1・4・5、SD2・3の遺構掘削を行う。
- ・ 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。

2008(平成20)年10月22日(水)

- ・ アスファルト除去及び表土掘削、現況地盤から40~60cm下げる。
- ・ 遺構検出面のレベル高くなる模様。
- ・ SK7は炭化材と焼土が埋土の黒褐色土に入る。大破片の土師器甕・鍋が出土。
- ・ SD6・8・9・10は遺物少量。
- ・ 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。
- ・ 午後、降雨のため作業休止。

2008(平成20)年10月27日(月)

- ・ アスファルト除去及び表土掘削(90~100cm下げる)。
- ・ 土坑、溝、柱穴確認(SK12・13、SD11・14・15)。
- ・ 遺構掘削(SK12・13、SD11・14・15)。
- ・ SK7は遺構の壁が熱を受け硬化しており、土師器焼成坑の可能性がでてきた。
- ・ 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。
- ・ 個別遺構の写真撮影。

2008(平成20)年10月28日(火)

- ・ アスファルト除去及び表土掘削(A39まで掘削)、



第1図 遺跡地形図及び調査区位置図（1：4,000）※点線は遺跡範囲

- 南北方向の調査区に入る。
- 柱穴確認。
  - S K 7 の部分は調査区を拡張、遺構の形状は二等辺三角形状になる模様。
  - 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。
  - 個別遺構の写真撮影。
- 2008(平成20)年10月29日(水)
- アスファルト除去及び表土掘削 (H 2まで掘削)。
  - 遺構検出面のレベルが高くなる模様。
  - 遺構検出で、土坑、溝、柱穴確認 (S K18・19・20・22、S D21)。
  - A10から西部分の遺構掘削 (S K18・19・20・22、S D21)。
  - 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。
  - 個別遺構の写真撮影。
- 2008(平成20)年10月30日(木)
- アスファルト除去及び表土掘削 (I 2まで掘削)。
  - 遺構検出で、土坑、溝、柱穴確認 (S K23、S D24)。
  - A10から西部分の遺構掘削 (S K23、S D24)。
  - 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。
  - 個別遺構の写真撮影。
- 2008(平成20)年10月31日(金)
- 柱穴、落ち込み確認。S K23は井戸の可能性があり、掘削深度が深くなると想定し掘削は最後まで行わなかった。
  - 遺構平面図、土層断面図を調査と平行して作成。
  - 個別遺構の写真撮影。
  - 埋め戻し開始。
- 2008(平成20)年11月4日(火)
- 遺構平面図に増設したポイントを測量。
- 2008(平成20)年11月5日(水)
- 調査現地の引渡し。
- (3)掘削の方法**
- 掘削は、基本的に現況地盤から以下を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。なお、遺物包含層掘削の一部は重機で行った。
- (4)遺構図面の作成について**
- 遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。
- 平面図（全図）…1:50
  - 遺構平面図…1:10
  - 土層断面図…1:50
- (5)遺構及び遺物写真について**
- 調査区の全景写真は、調査前及び後とも調査区を臨める現況地盤上から三脚を使用し撮影した。個別の遺構写真等は、三脚を利用し撮影した。フィルムは、4×5cm版（モノクロ・カラー・ポジ）に加え、35mm版（モノクロ・カラー・ポジ）を使用した。カメラは、Wista 4×5、NIKON FM2を使用した。なお、報告書掲載の遺物写真については、フィルムは、6×9版（モノクロ・カラー・ポジ）を使用した。カメラは、Wista 4×5を使用した。

## 4 文化財保護法等の諸通知

- 三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる発掘調査通知  
平成20年10月9日付け、四環農第391号
- 文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告  
平成20年10月20日付、教理第296号
- 遺失物法にかかる文化財発見・認定通知  
平成20年11月26日付、教委第12-4416号

(小瀬 学)

## II 位置と環境

今回の発掘調査の対象となった岡田遺跡（1）は、現在の鈴鹿市立牧田小学校の東に隣接するところにある。また、鈴鹿川南岸の低位段丘端に立地している。遺跡から北方及び東方にかけて、平野が広がっている。

岡田遺跡周辺の歴史的環境を探るために、鈴鹿川の北側に広がる低地部分の様相と丘陵部分の様相を含めて考える必要があろう。以下に、これらのことを見まえ、弥生時代以降の遺跡の状況を概観したい。

弥生時代については、岡田遺跡から北東約1.5kmには河田宮ノ北遺跡（2）、宮ノ前遺跡（3）、八重垣神社遺跡（4）が存在する。また、東方約5kmには上箕田遺跡（5）がある。弥生時代の集落と想定されていたが、これまでの発掘調査の結果から、遺跡の形成が縄文時代晩期にまで及ぶことが確認された。<sup>1</sup> 八重垣神社遺跡第2次調査では弥生時代前期の土器群がまとまって出土した。<sup>2</sup> 弥生時代中期の状況は判然としないが、高岡山遺跡（6）では、菱環鉢式銅鐸片の出土しており、弥生時代中期を考える上で重要な資料といえるだろう。<sup>3</sup> また、一反通遺跡（7）は、弥生時代中期から後期にかけての集落である。弥生時代後期に入ると、丘陵上に立地する磐城山遺跡（8）があげられる。磐城山遺跡は、弥生時代以降、古墳時代前期以降の竪穴住居跡等の遺構群も多数確認された。<sup>4</sup>

古墳時代に入ると、低地部分への遺跡の進出が多く見られる。岡田遺跡の南方に隣接する岡田南遺跡（9）では、土壙墓や方墳2基、竪穴住居等が確認された。<sup>5</sup> 土壙墓からは多数の玉類が出土した。西方に隣接する天神遺跡（10）では、竪穴住居跡等が確認され、滑石製紡錘車・管玉が確認された。<sup>6</sup> 神戸中学校遺跡（11）からは竪穴住居跡が確認された。<sup>7</sup> また、鈴鹿川から北側の丘陵上には、広い範囲で古墳群が確認されている。寺田山1号墳は全長約70mの前方後円墳で、前期の古墳と考えられる。富士山1号墳は中期の前方後円墳である。<sup>8</sup> 西側の丘陵上には60基以上の石薬師東古墳群（12）が中期から後期にかけて形成されたと考えられ、後に県指定となった

馬形埴輪が出土した。<sup>10</sup>

古代に入り律令制が整備されると、この周辺は「河曲郡」に相当する地域となる。『倭名類聚抄』によれば神戸・駅家・中跡・海部・川部・賀美・資母・深田の8郷で構成されていた。これら郡内諸郷の比定は神戸郷を除き明確でない。<sup>11</sup> また、河曲郡には駅家が存在していたことになっているが、駅家の具体的な位置は判明していない。河曲駅家は、鈴鹿駅家・朝明駅家の間に存在するものと考えられ、伊勢国分寺（13）狐塚遺跡（14）のある一帯に所在するものと思われる。今回の岡田遺跡の発掘調査により、土師器焼成坑が確認され、当該地域の古代の状況も判明しつつあるといえよう。

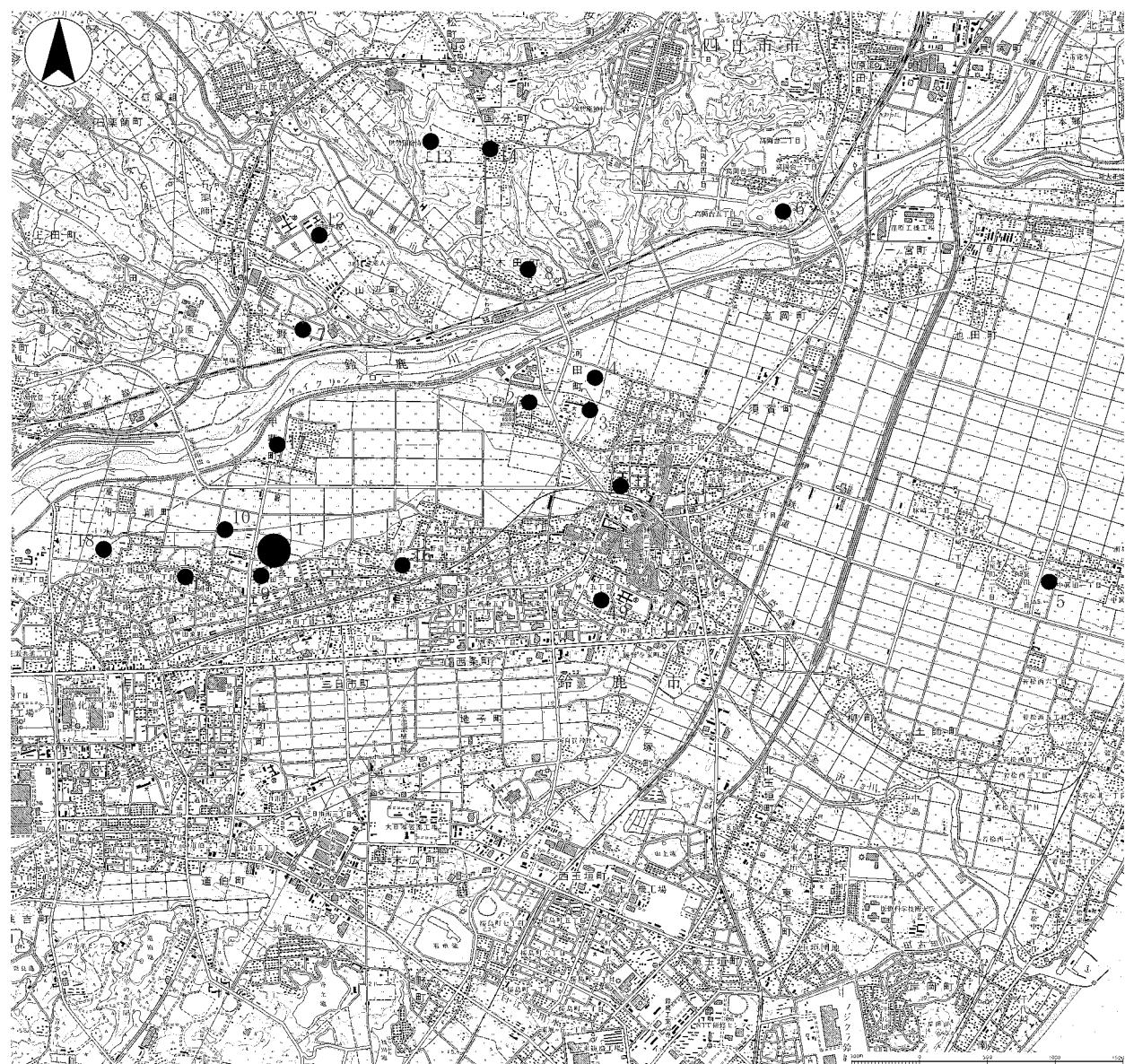
平安時代から中世にかけて当地においては、「河曲莊」が存在した。河曲莊は、当初は摂関家領で、その後鎌倉時代には近衛家領となる。<sup>12</sup> 中世の岡田遺跡周辺の状況については、岡田遺跡の南西約500mに位置する岡太神社遺跡（15）では、土坑や溝等が確認された。<sup>13</sup> また、東方約1kmに位置する竹野1丁目遺跡（16）では、掘立柱建物、柵、井戸水田等が確認され、土師器、青磁が出土した。在地領主の居宅である可能性もある。<sup>14</sup> 岡部氏館跡（17）や平田城跡（18）といった中世城館の存在も確認されている。中世末頃には、東約15kmに神戸城（19）が築かれた。元々は、国人領主の神戸氏に関連する城館と考えられるが、織豊期の織田信長侵攻以降、織豊系城郭として展開する。その後、江戸時代となり譜代大名である本多氏が城主となって以降、城郭への改変が加えられ、近代を迎えることとなる。<sup>15</sup>

（小瀬 学）

[註]

- 1 鈴鹿市教育委員会『上箕田遺跡』（1993年）
- 2 三重県埋蔵文化財センター『河曲の遺跡』（2005年）
- 3 岡田登「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片」  
（『考古学雑誌』75-4、1990年）
- 4 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市埋蔵文化財年報』V 平成9  
年度（1990年）
- 5 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報

- 10』(1999年)
- 6 鈴鹿市『牧田地区遺跡調査概況報告』(1970年)
- 7 鈴鹿市教育委員会『第4回鈴鹿市埋蔵文化財展』(1994年)
- 8 鈴鹿市『鈴鹿市史』第1巻(1980年)
- 9 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市国分町富士山10号墳調査概要』(1978年)
- 10 三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』(2000年)
- 11 山中章「伊勢国北部における大安寺施入墾田地成立の背景」(『ふびと』54 三重大学歴史研究会 2002年)
- 12 鈴鹿市『鈴鹿市史』第1巻(1980年)、平凡社『三重県の地名』日本歴史地名大系24(1983年)
- 13 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』(1997年)、同『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報V』(1998年)
- 14 鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報II』(1995年)、同『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』(1997年)
- 15 三重県教育委員会『三重の近世城郭』(1984年)



第2図 岡田遺跡の周辺遺跡 (1:50,000) ※国土地理院発行1:25,000「鈴鹿」の一部使用

### III 遺構

#### 1 基本層序

発掘調査の対象となる部分については現在道路となっている。現況地盤の上から、アスファルト、碎石、盛土、黒褐色土（10YR3/2・遺物包含層）、明黄褐色土（10YR6/6・遺構検出面）である。遺構は明黄褐色土の上面で確認することができた。盛土については現在の道路以前の道路によるものと思われる。地点により1から2層が確認でき、填圧を受け硬化していた。その下に軟い遺物包含層が一部に存在する。遺物包含層が確認できない部分については、道路敷の設定時に削平されたものと思われる。調査区の屈曲部分では、自然地形と考えられる落ち込みが

みられる。米軍撮影の航空写真や旧地形図を確認すると、米軍の撮影以降に造成が行われ現在の地形となつたことが判明した。

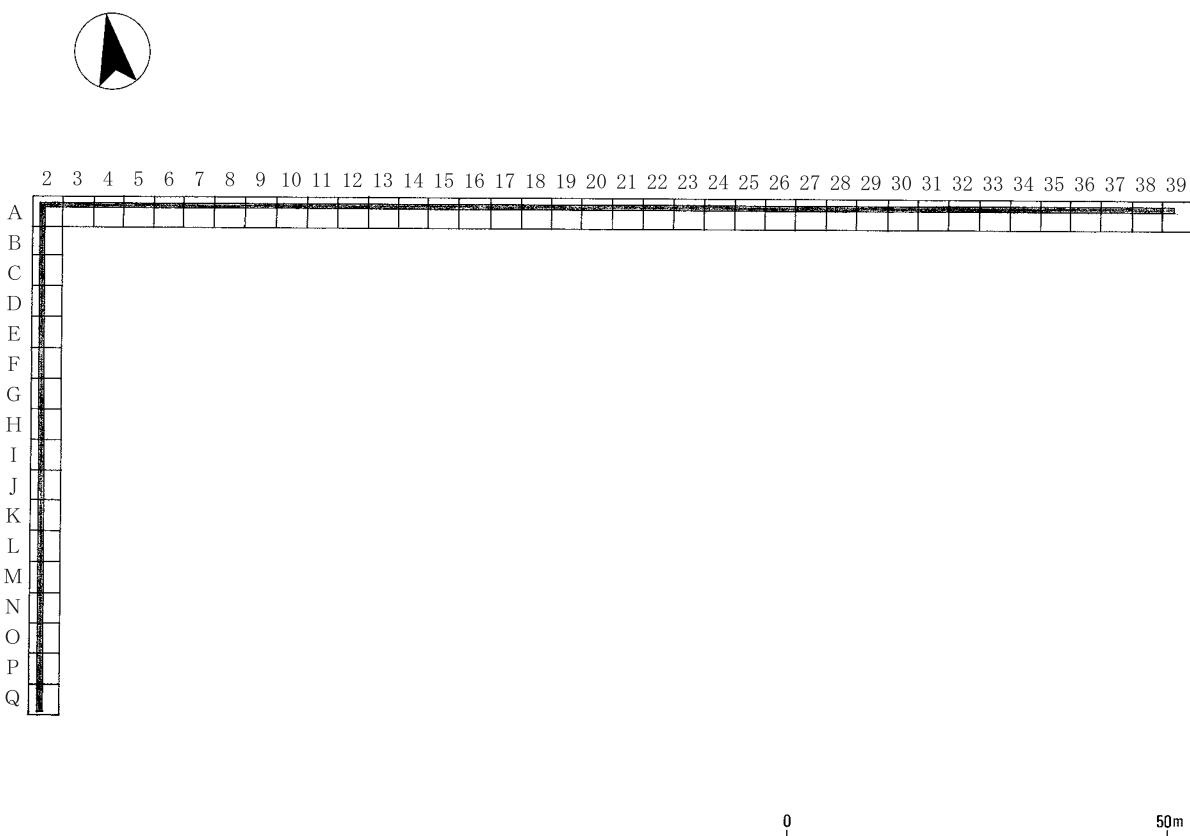
#### 2 各時代の遺構

狭小な調査区であるので、各遺構の全体を把握することは難しいと思われる。ここでは、当然のことであるが調査区内で確認された部分での情報を述べるに留めたいと思う。

##### 古墳時代

##### S D 8

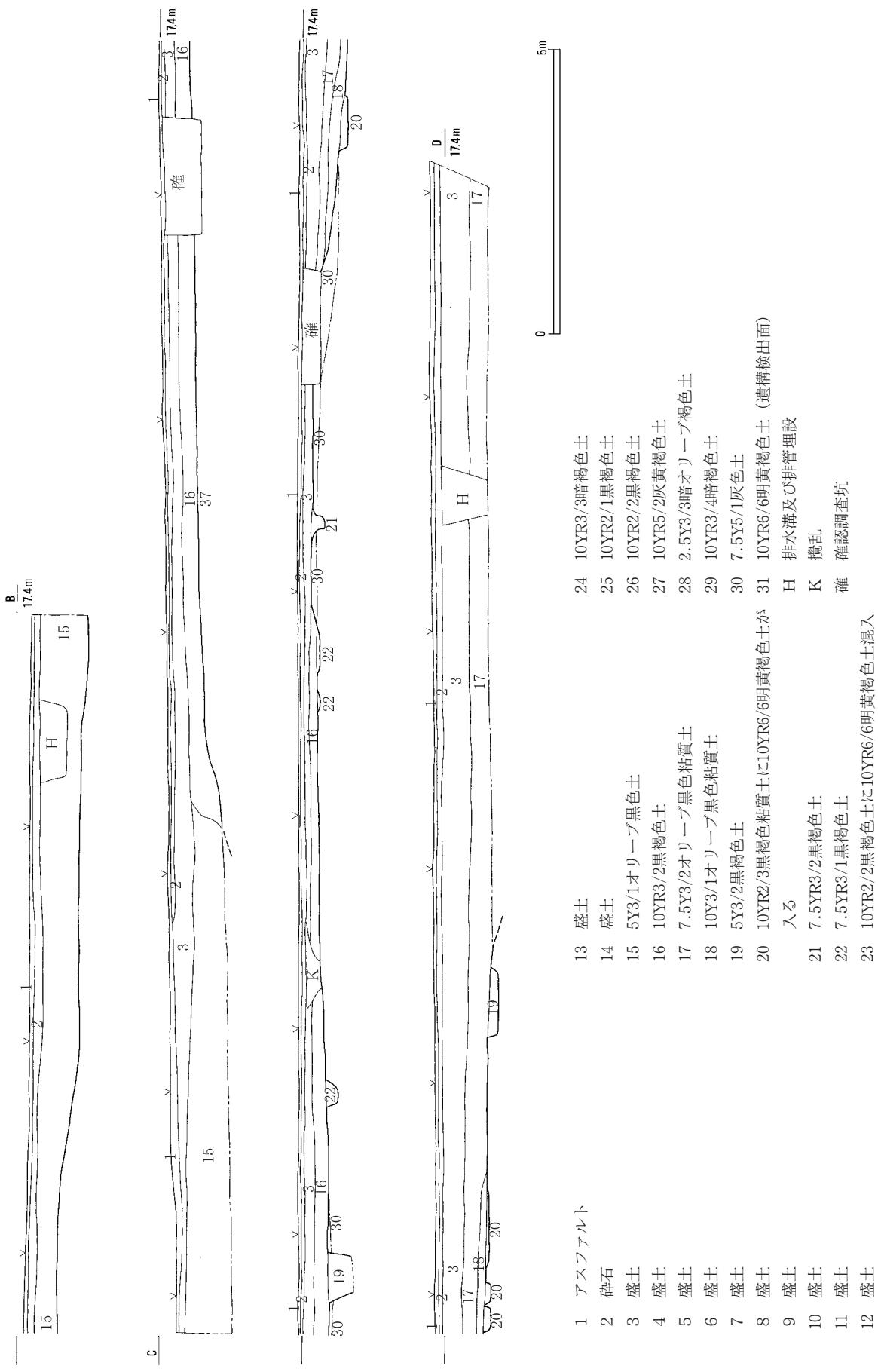
調査区内で確認できた規模は、幅0.45m、深さは遺構検出面から0.11mと浅い。遺構埋土は暗オリ一



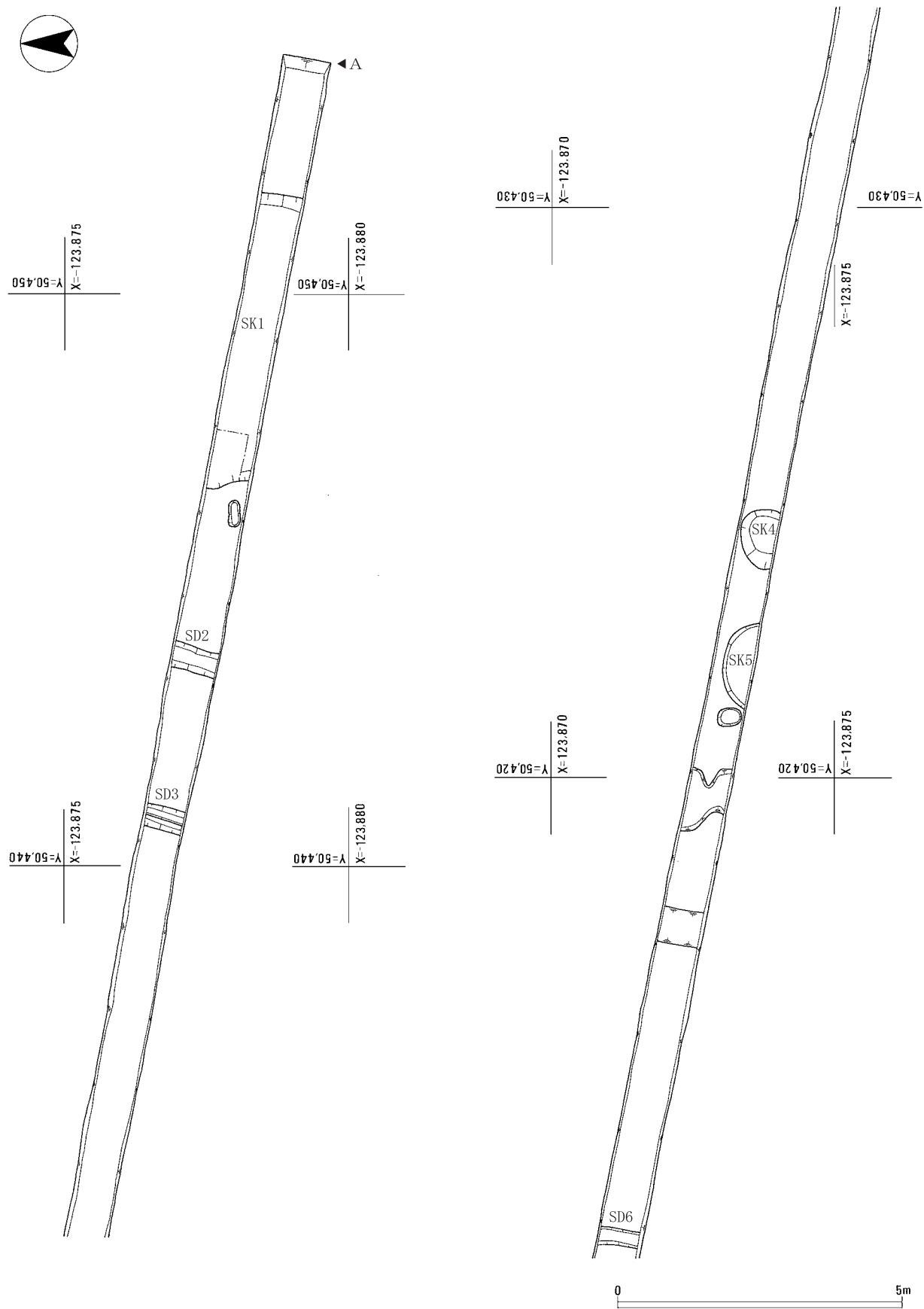
第3図 地区割図（1:1,000）



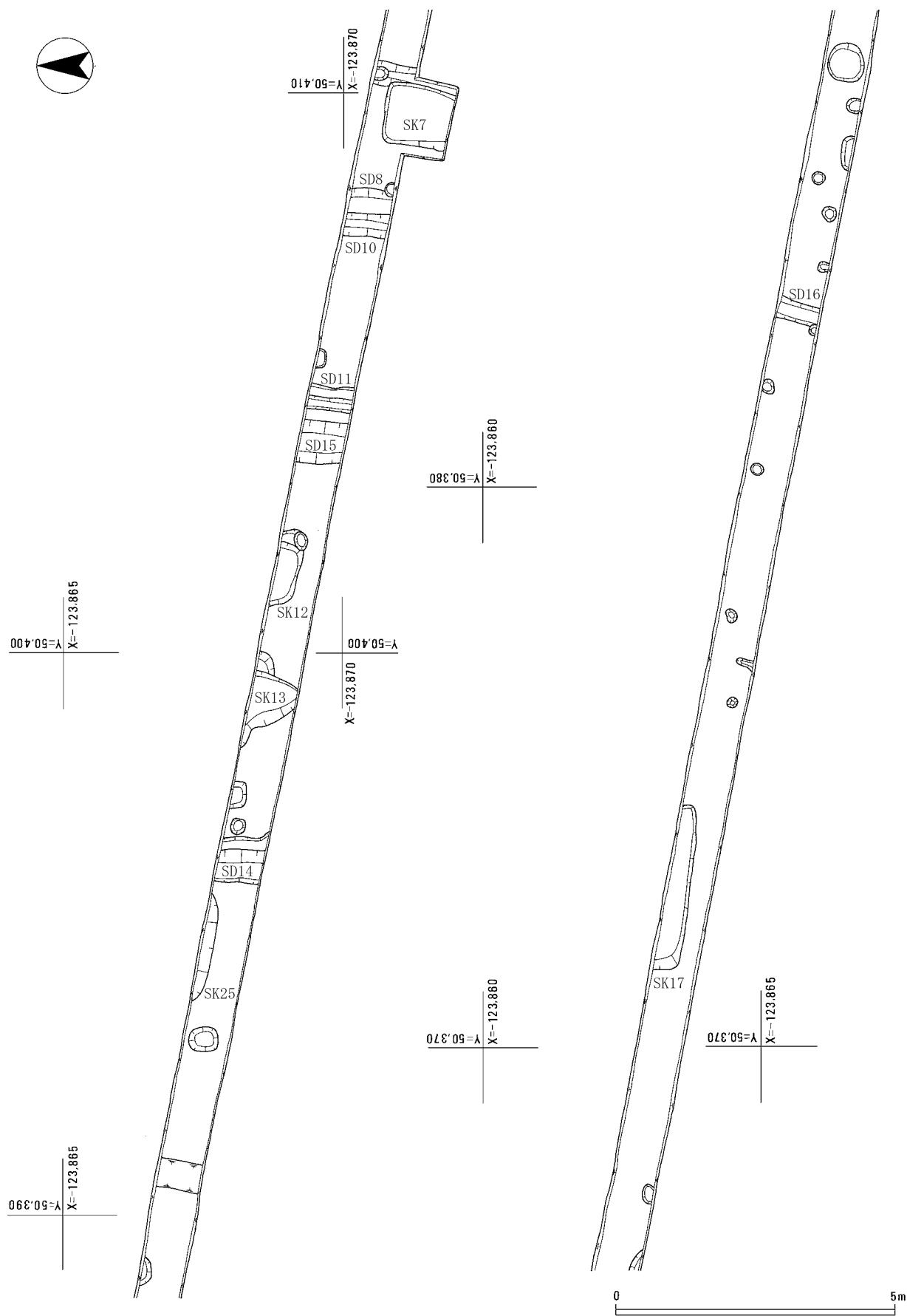
第4図 土層断面図1 (1:100)



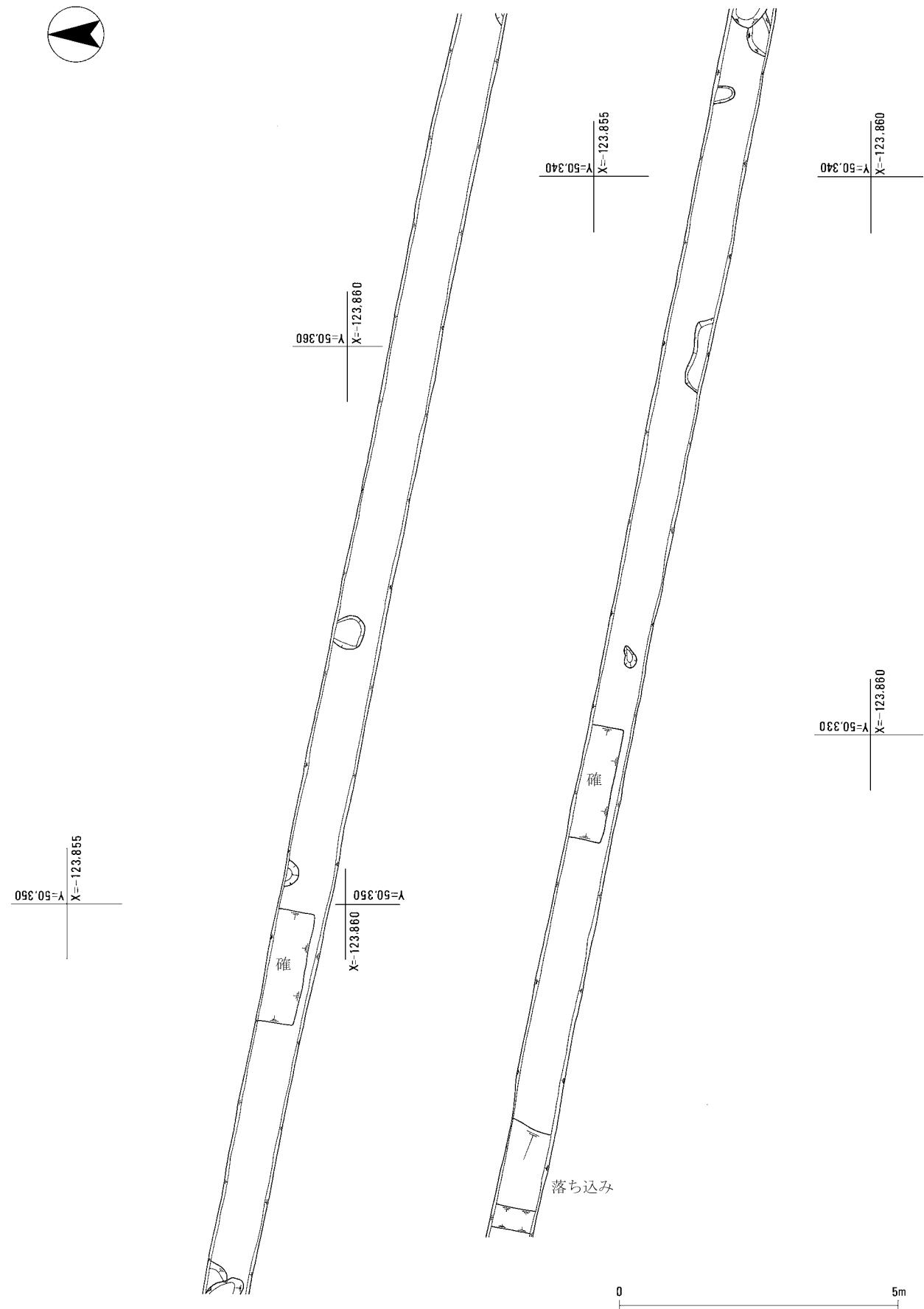
第5図 土層断面図2 (1:100)



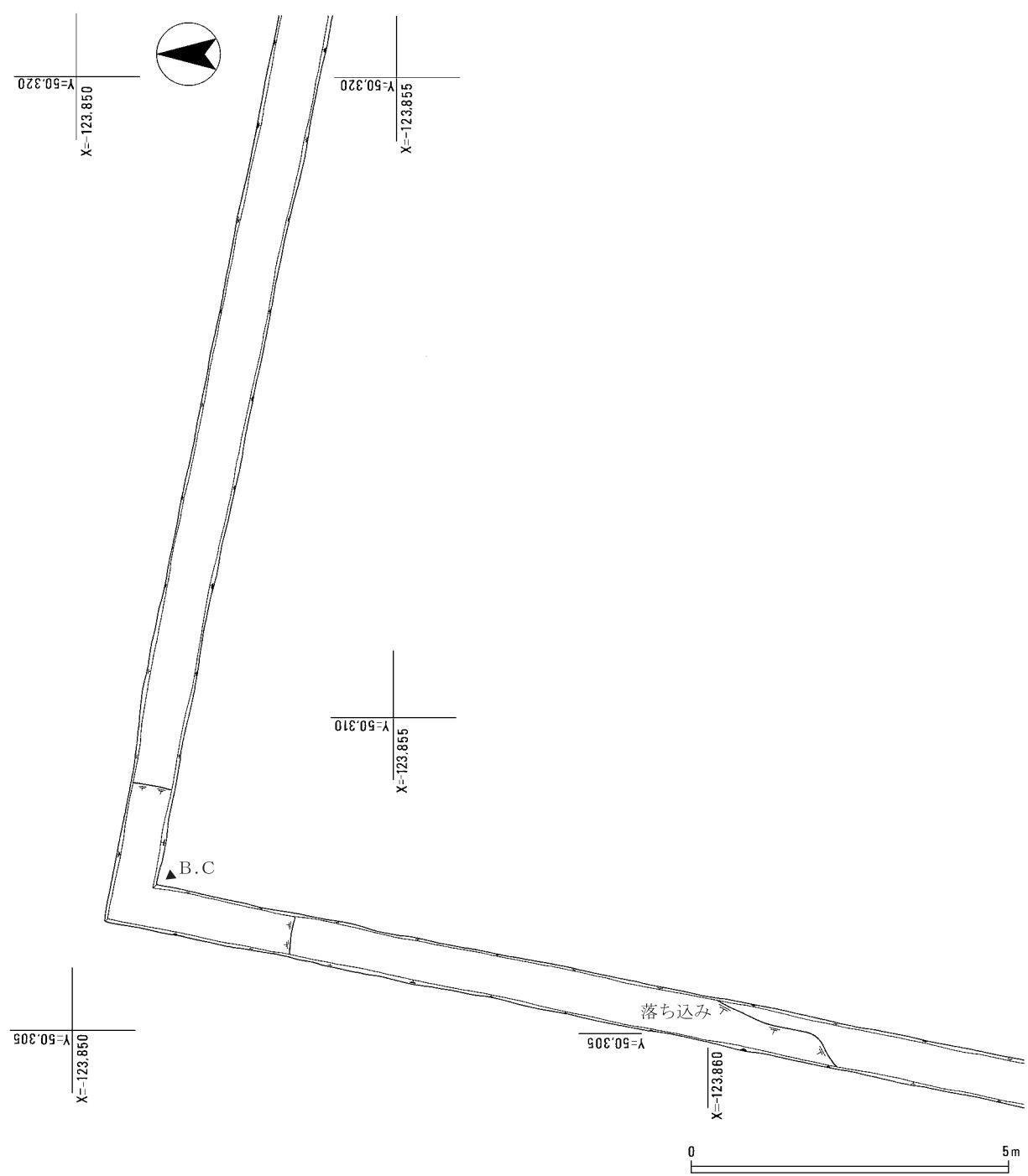
第6図 遺構平面図1 (1:100)



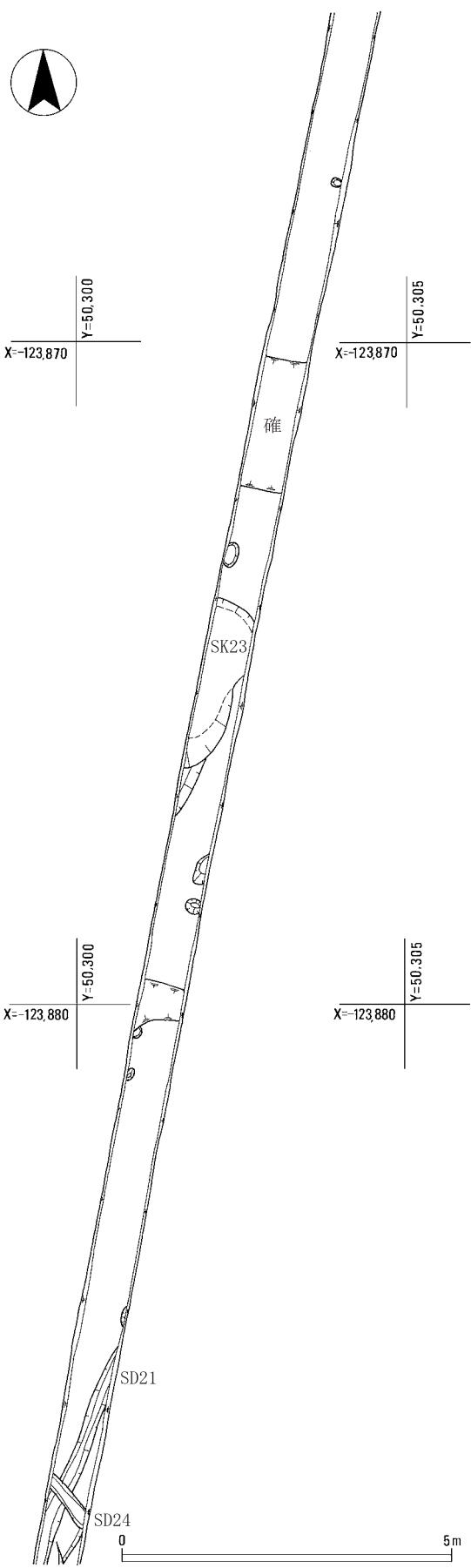
第7図 遺構平面図2 (1:100)



第8図 遺構平面図3 (1:100)



第9図 遺構平面図4 (1:100)



第10図 遺構平面図5 (1:100)

ブ褐色土の1層であった。古墳時代前期のものと思われる土師器甕、台付甕の出土が認められた。

#### S D14

調査区内で確認できた規模は、幅0.50m、深さは遺構検出面から0.28m。断面形は隅の丸い逆台形であった。遺構埋土については、黒色土の1層であった。古墳時代前期と考えられる土師器高杯や小形壺が出土した。

#### 古代

##### S K 1

調査区内で確認できた規模は、最大1.80m以上、深さは遺構検出面から0.10~0.20m。円形の土坑であろうか。遺構埋土については黒色土の1層であった。奈良時代以降のものと考えられる土師器片の出土が少量認められた。

##### S K 7

調査区内で確認できた規模は、長軸は最大1.28m以上、短軸は1.07m、深さは遺構検出面から0.26~0.32m。遺構検出面からほぼ垂直に掘り込まれていた。比較的短期間に土坑自体が埋まったようで黒褐色土1層の埋土であった。底面はそれほどでもないが、調査区内で確認できた部分では、壁面が熱を受け硬化赤変している状況がみられた。確認できた部分のほぼ全体を巡っている。調査区内の形状から、二等辺三角形状の土坑であることが窺えよう。土師器甕・鍋が遺構埋土から出土した。また、量的には多くはないが炭化材や焼土が含まれていた。三重県中部、多気郡明和町等に多く確認されている土師器焼成坑と考えられる。黒褐色の遺構埋土から出土した炭化材については、放射性炭素同位体測定を行った。7世紀代という測定結果をえることができた。出土した遺物の時期については、少し時期が下る可能性がある。分析の詳細については、V章自然科学分析に譲りたいと思う。

##### S K 23

調査区内で確認できた規模は、最大2.30m、深さは遺構検出面から0.40m以上であった。楕円形状の土坑と思われる。このような形状ならば井戸との推定ができるが、何分狭小な調査区であるので推測の域は出ず、調査区の制約もありすべて掘削することは不可能であった。遺構埋土は黒褐色土の1層は確

認できた。出土遺物については、古代のものと思われる土師器甕・高杯の出土がみられた。

#### SD 6

調査区内で確認できた規模は、幅0.28m、深さは遺構検出面から0.10mと浅い。遺構埋土については、黒褐色土の1層であった。奈良時代前半の土師器杯・杯蓋・甕が出土した。

#### SD 9

調査区内で確認できた規模は、幅0.42m、深さは遺構検出面から0.04~0.07mと浅い状況であった。

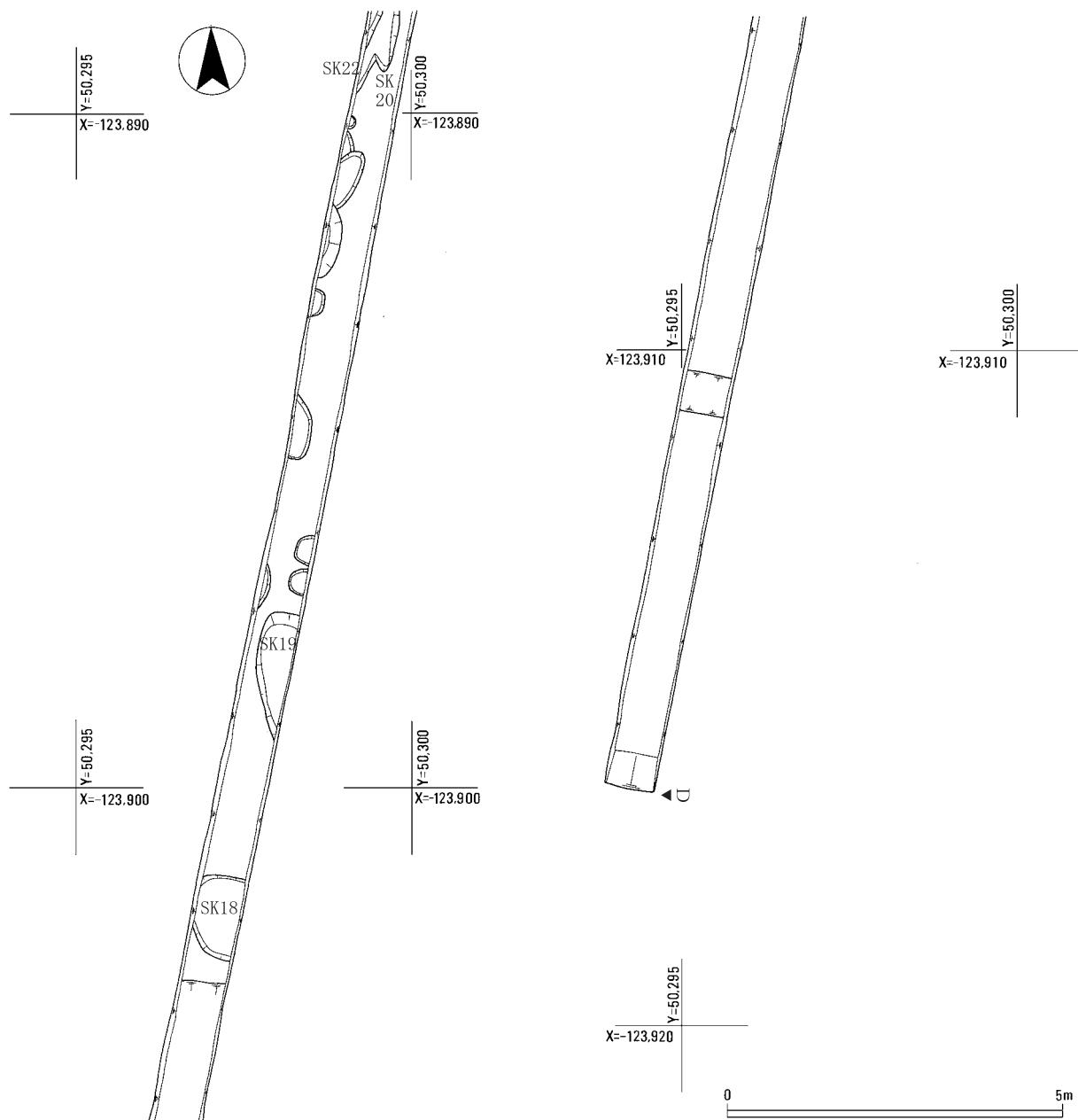
遺構埋土は、黒褐色土の1層であった。奈良時代のものと思われる土師器片の出土が少量認められた。

#### SD 10

調査区内で確認できた規模は、幅0.40m、深さは遺構検出面から0.27m。遺構埋土については、黒褐色土の1層であった。土師器杯・甕小片の出土が認められた。時期の判断に苦しむが、古代のものであろう。

#### SD 11

調査区内で確認できた規模は、幅0.52m以上、深



第11図 遺構平面図6（1：100）

さは遺構検出面から0.12~0.19m。遺構埋土は暗褐色土層の1層であった。奈良時代のものと思われる土師器片の出土が少量認められた。

#### S D15

調査区内で確認できた規模は、幅0.78m、深さは遺構検出面から0.24~0.26m。遺構埋土については、黒色土の1層であった。出土遺物については奈良時代の土師器甕・鍋を確認した。

#### S D16

調査区内で確認できた規模は、幅0.35m、深さは遺構検出面から0.05~0.06mで。遺構埋土については、黒褐色土の1層であった。出土遺物については、古代の土師器小片を少量確認した。

#### 中世

#### S K17

調査区内で確認できた規模は、最大2.90m、深さは遺構検出面から0.02~0.08mと浅い。隅丸方形状の土坑であろうか。遺構埋土は黒褐色土の1層であった。遺構埋土中には、黄褐色土が小ブロックで混入する一定でない様相が確認できた。古代から中世にかけての土師器類が出土した。

#### S K18

調査区内で確認できた規模は、最大1.25m、深さは遺構検出面から0.12~0.17m。橢円形状の土坑と思われる。遺構埋土については、黒褐色土の1層であった。古代から中世にかけての土師器類の出土がみられた。

#### 近世以降

#### S K13

調査区内で確認できた規模は、最大1.20m以上、深さは遺構検出面から0.10~0.20m。形状としては橢円形であろうか。遺構埋土からは黒褐色土の1層であった。近世以降のものと考えられる陶器・磁器類が少量出土している。

#### S K19

調査区内で確認できた規模は、最大1.90m、深さは遺構検出面から0.01~0.03mである。隅丸方形状の土坑であろうか。遺構埋土については、黒褐色土の1層であった。近世以降のものと思われる陶器甕の出土がみられた。

#### 時期が確認できない遺構

#### S K 4

調査区内で確認できた規模は、最大1.05m以上、深さは遺構検出面から0.10~0.18mである。円形の土坑であろうか。調査区の範囲内ではあるが遺物の出土は確認できなかった。

#### S K 5

調査区内で確認できた規模は、最大1.50m以上、深さは遺構検出面から0.03~0.05mである。円形の土坑であろうか。調査の範囲内ではあるが遺物の出土は確認できなかった。

#### S K12

調査区内で確認できた規模は、最大1.20m以上、深さは遺構検出面から0.10~0.20mである。橢円形の土坑であろうか。遺物の出土は確認できなかった。

#### S K20

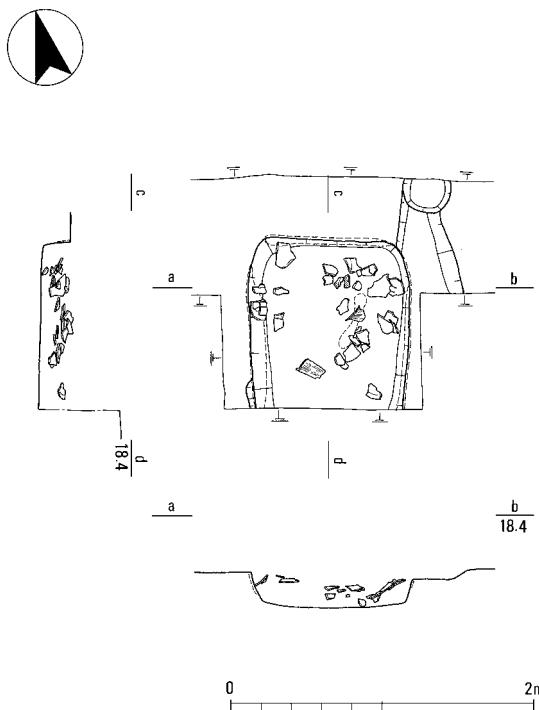
調査区内で確認できた規模は、最大1.05m、深さは遺構検出面から0.01~0.04mである。出土遺物が確認できなかったため所属時期は判然としない。

#### S K22

調査区内で確認できた規模は、最大1.95m、深さは遺構検出面から0.04~0.06mである。出土遺物が確認できなかったため所属時期は判然としない。

#### S K25

調査区内で確認できた規模は、最大2.90m、深さ



第12図 SK 7 平面図・断面図 (1 : 50)

は遺構検出面から0.02~0.08mである。隅丸方形状の土坑であろうか。出土遺物が確認できなかつたため所属時期は判然としない。

#### S D 2

調査区内で確認できた規模は、幅0.42~0.43m、深さは遺構検出面から0.20mである。調査区の範囲内ではあるが遺物の出土は確認できなかつた。

#### S D 3

調査区内で確認できた規模は、幅0.28m、深さは遺構検出面から0.40mである。調査区の範囲内ではあるが遺物の出土は確認できなかつた。

#### S D 21

調査区内で確認できた規模は、幅0.20~0.30m、深さは遺構検出面から0.03~0.10mである。S D 24を切つてゐる。出土遺物が確認できなかつたため所属時期は判然としない。

#### S D 24

調査区内で確認できた規模は、幅0.18~0.25m、深さは遺構検出面から0.17~0.19mである。出土遺物が確認できなかつたため所属時期は判然としない。

(小瀬 学)

## IV 遺物

### A 22pit11出土遺物(1)

1は弥生土器壺。内弯する口縁部のみが残存する状況である。外面には2枚貝による波状文が2条巡つてゐる。内面は口縁部付近が横位のナデ、以下縦位にミガキが施されている。弥生時代終末期のものと考えられる。

### S D 8 出土遺物(2)

2は土器器台付甕底部の台部分である。外面には強めのハケメが施されている。内面は粗雑なナデがみられる。残存している部分が底部のみということもあり判断しがたいが、概ね古墳時代前期のものと考えられる。

### S K 23出土遺物(3)

3は土器高杯の脚部である。内外面とも摩滅ため調整等が判然としないがナデである。残存している部分が脚部のみということもあり判断しがたいが、概ね古墳時代前期のものであろう。

### S D 14出土遺物(4・5)

4は土器高杯の脚部である。内外面とも摩滅ため調整等が判然としないがナデが確認できる。残存している部分が脚部のみということもあり判断しがたいが、概ね古墳時代前期のものであろう。5は土器小形壺。底部のみが残存する状況である。内外面にはナデ及びオサエがみられる。古墳時代前期のものと思われる。

### S K 7 出土遺物(6~12)

6・7は土器器長胴甕である。口縁部から体部上半部まで残存する。土器外面については、口縁端部には面を取り、口縁部の屈曲部分まではヨコナデ、以下摩滅のため多くはないが斜位にハケメが施されている。内面については、口縁部の屈曲部分まではヨコナデ、以下横位及び斜位にハケメが施されている。8は土器器長胴甕である。口縁部から体部上半部まで残存する。土器外面については、口縁端部には面を取り、口縁部の屈曲部分まではヨコナデ、以下細かいハケメが斜位に施されている。内面については、口縁部の屈曲部分まではヨコナデ、以下横位及び斜位にハケメが施されている。9は土器甕あるいは鍋と思われる。土器外面については、口縁部の屈曲部分まではヨコナデ、以下摩滅のため多くはないが縦位にハケメが施されている。内面については、口縁部の屈曲部分まではヨコナデがみられる。これらは土器甕及び鍋ということで所属時期については判断に苦しむが、奈良時代前半期のものと思われる。11は何らかの脚部と思われる。土器質ではある。12については粘土塊である。焼成に関わるものであろうか。これ以外にも数個確認した。これらも奈良時代前半

期のものと考えてよいだろう。

#### S D 6 出土遺物(13・14)

13は土師器杯である。底部から直線的に口縁部が立ち上がる。摩滅のため調整等は判然としない。14は土師器蓋である。口縁部小片である。これらは奈良時代前半期のものと考えられる。

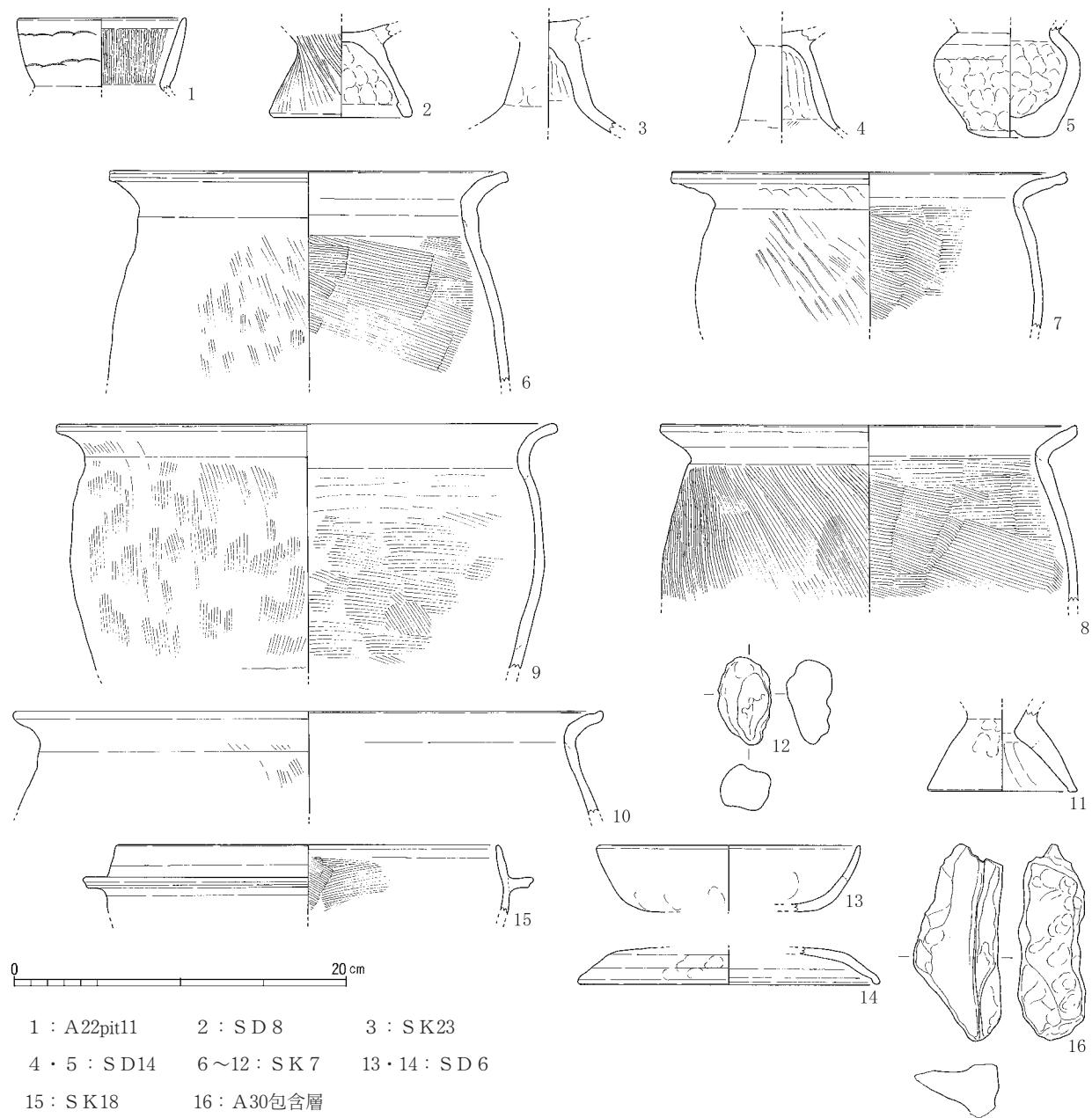
#### S K18出土遺物(15)

15は土師器羽釜の体部で鍔部分が残存している。やや小形のものである。室町時代前半期のものと思われる。

#### 包含層出土遺物(16)

16は土師質の土製品である。移動式竈の一部であろうか。奈良時代前半期のものであろうか。

(小瀬 学)



第13図 出土遺物実測図 (1:4)

# V 自然科学分析

## 1 岡田遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

### 1 測定対象試料

岡田遺跡は、三重県鈴鹿市竹野町に所在する。遺跡は鈴鹿川から南に1.0km程はなれた低位丘陵端に位置する。測定対象試料は、SK 7出土の木炭（1:IAAA-82220）である。

### 2 測定の意義

遺構の時期の決定と、出土土器の時期の比較検討を行なう。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA: Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

### 4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO<sub>2</sub>II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) 14C年代（Libby Age: yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ<sup>13</sup>Cによって補正された値である。14C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、14C年代の誤差（±1σ）は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) δ<sup>13</sup>Cは、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。
- (5) 曆年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差（1σ=68.2%）あるいは2標準偏差（2σ=95.4%）で表示される。曆年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五

入しない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## 2 岡田遺跡出土炭化材の樹種

### はじめに

岡田遺跡は、鈴鹿川右岸（南岸）の低位段丘上に立地する。今回の発掘調査により、盛土の下位より奈良時代～室町時代の土坑、溝等の遺構が検出されている。

本報告では、奈良時代の土師器焼成坑と考えられるSK7から出土した炭化材の樹種を明らかにするために樹種同定を実施する。

### 1 試料

試料は、SK7から出土した炭化材1点（No.1）である。

### 2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本およ

### 6 測定結果

出土の木炭の<sup>14</sup>C年代は $1370 \pm 30$ yrBPである。暦年較正年代（ $1\sigma$ ）は、642～673ADである。試料は木炭であり、確認された年輪の最外部から測定試料を採取している。樹皮あるいは木材自体の最外年輪は確認できなかつたため、測定結果の年代は、実際の樹木の枯死年代を遡る可能性がある。炭素含有率は62.4%であり、十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題は無く、妥当な年代と判断される。

（[株]加速器分析研究所）

び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）やRichter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）を参考にする。

### 3 結果

炭化材は、針葉樹のマツ属複維管束亞属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon*)  
マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部付近に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82220	1	岡田遺跡 SK7 内	木炭	AAA	-26.39 ± 0.59	1,370 ± 30	84.33 ± 0.33

[#2623]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82220	1,390 ± 30	84.09 ± 0.31	1,369 ± 31	642AD - 673AD (68.2%)	607AD - 690AD (94.0%) 752AD - 761AD (1.4%)

[参考値]

第1表 測定結果と暦年較正

窓状となり、1分野に1個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

#### 4 考察

SK7は、平面形が二等辺三角形状を呈する。遺構底部に被熱はみられないが、底面から立ち上がる壁面には焼土痕が残存しており、埋土には焼土や炭化物が混入している。こうした状況から、土師器焼成坑と考えられており、炭化材は焼成時の燃料材の可能性がある。なお、SK7では奈良時代の土師器甕が出土しているが、いずれも出土状況から廃棄されたものと考えられている。

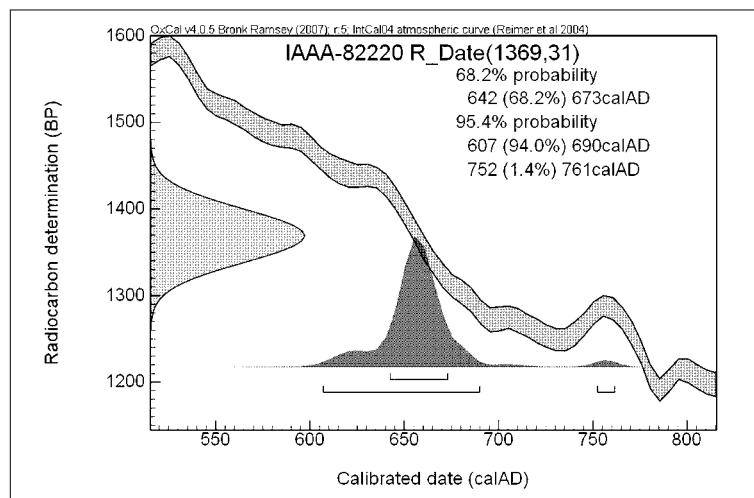
炭化材は、針葉樹の複維管束亜属に同定された。本州に生育する複維管束亜属には、アカマツ、クロマツの2種と、これらの雑種がある。いずれも針葉樹としてはやや重硬な部類に入るが、松脂を多く含んでいるために燃焼性が高い。今回の結果から、土師器焼成時の燃料材に、燃焼性の高い複維管束亜属の木材が利用されていた可能性がある。

三重県内では、土師器焼成時の燃料材の樹種選択に関する資料がほとんど無いため、利用状況を把握するために、今後さらに資料を蓄積することが望まれる。

([株]加速器分析研究所)

#### 参考・引用文献

- 1 岡田遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)
- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355–363
  - Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425–430
  - Bronk Ramsey C. 2001 Development of the *Radiocarbon* Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355–363
  - Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381–389
  - Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029–1058
- 2 岡田遺跡出土炭化材の樹種
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
  - Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
  - 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- ※) 本測定は、当社協力会社・パリノ・サーヴェイ (株) にて実施した。



第14図 曆年較正年代グラフ（参考）

# VI 結語

## 1 調査成果

今回の発掘調査で、弥生時代から近世までの遺構及び遺物を確認することができた。以下に時代毎に概要をまとめたい。

### a 弥生時代

遺物は若干確認したもの、明確な遺構については、調査区内で確認することはできなかった。発掘調査地の周囲の地形の状況を踏まえれば、調査区の東側に遺跡が展開している可能性があろう。

### b 古墳時代

溝2条を確認した。溝については、調査区より延びていくことは明確である。

### c 古代

飛鳥時代については、明確な遺構を調査区内では確認できなかった。奈良時代は、土坑及び溝、土師器焼成坑を確認した。時期を特定できるのは、Ⅲで述べた遺構群のみである。土師器の焼成が行われていることから、消費地が遺跡周辺に存在することが考えられる。平安時代については、遺物のみの出土で遺構は確認していない。

### d 中世

土坑及び溝を確認することができた。しかしながら、出土した遺物群は小片がほとんどで時期の決定すら難しい状況である。

### e 近世以降

土坑を確認することができた。しかしながら、出土した遺物群は小片がほとんどで時期の決定すら難しい状況である。また、遺物については調査区全体から陶器及び磁器類が出土した。

## 2 自然科学分析からみえること

S K 7 出土の炭化材1点について、放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。

放射性炭素年代測定はAMS測定によるものである。測定結果は、7世紀代の範疇という結果であった。遺構から出土した土器群の時期を比較すると、測定結果の年代より少し新しくなるというというも

のであった。年代測定に対する取り扱いを考える上でも、今後のデータの蓄積が必要であると考える。

また、樹種は、針葉樹の複維管束亜属に同定された。松脂を多く含んでいたために燃焼性が高いものとされる。土器焼成時の燃料として使用されていた可能性があり、当時における燃料の樹種選択を考える上で良好な成果を得ることができた。

## 3 土師器焼成坑の確認

土師器焼成坑を1基、岡田遺跡では確認した。形態は細長い二等辺三角形状であることが想定できるものである。三重県の北部地域では確認数が少ない。一方、三重県南部地域では、多くの土師器焼成坑が確認されている。なかでも明和町北野遺跡では、検出数は200基を超えている。形態は二等辺三角形あるいは長台形を基本とし、6世紀から8世紀代のものがほとんどである。規模は、底辺が1.5~2.0m、長辺は3.0~4.0mの間のものが多く、最大のものは5mにもなるものもみられる。また、古い時期のものは大きく、新しい時期のものは小さいものが多い傾向がある。それは、古い時期には甕や鍋などの大きなものを作成し、新しい時期になると杯や皿といった小さなものを作成するようになったためと考えられる。<sup>1</sup> 放射性炭素年代測定結果や出土土器の所属時期を考えると岡田遺跡の検出例とも合致する傾向である。<sup>2</sup> また、時期は下るが、四日市市小牧北遺跡の平安期の検出例は規模が小さくなり、形態は円形となるものである。<sup>3</sup> 岡田遺跡の検出例と比較すると違いが明らかである。今回の発掘調査例については、三重県北部地域の土師器生産を考える上で、貴重な情報を得ることができたのではないだろうか。

(小瀬 学)

### [註]

1 三重県埋蔵文化財センター「VIまとめ」(『北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告』、1995年)

2 第V章を参照

3 三重県埋蔵文化財センター「Ⅲ遺構」『小牧北遺跡発掘調査報告』(2007年)

# 写 真 図 版



調査前状況（東から）



調査前状況（南から）

写真図版2



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査区東側調査状況（東から）



調査区全景（北から）

写真図版 4



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



SD 2 完掘状況（南東から）



SD 3 完掘状況（南東から）

写真図版 6



SK 5 完掘状況（北から）



SK 4 完掘状況（北から）



SK 7 遺物出土状況（北東から）



SK 7 遺物出土状況（北から）

写真図版 8



SK 7 遺物出土状況（北から、拡張後）



SK 7 完掘状況（西から）



SK 7 完掘状況（北から）



SK 13 完掘状況（南西から）

写真図版10



S K 11及び15完掘状況（南西から）



S D 8 及び10完掘状況（北東から）



S D14遺物出土状況（東から）



S D21完掘状況（南から）

写真図版12



SK 19完掘状況（北から）



SK 18完掘状況（北から）

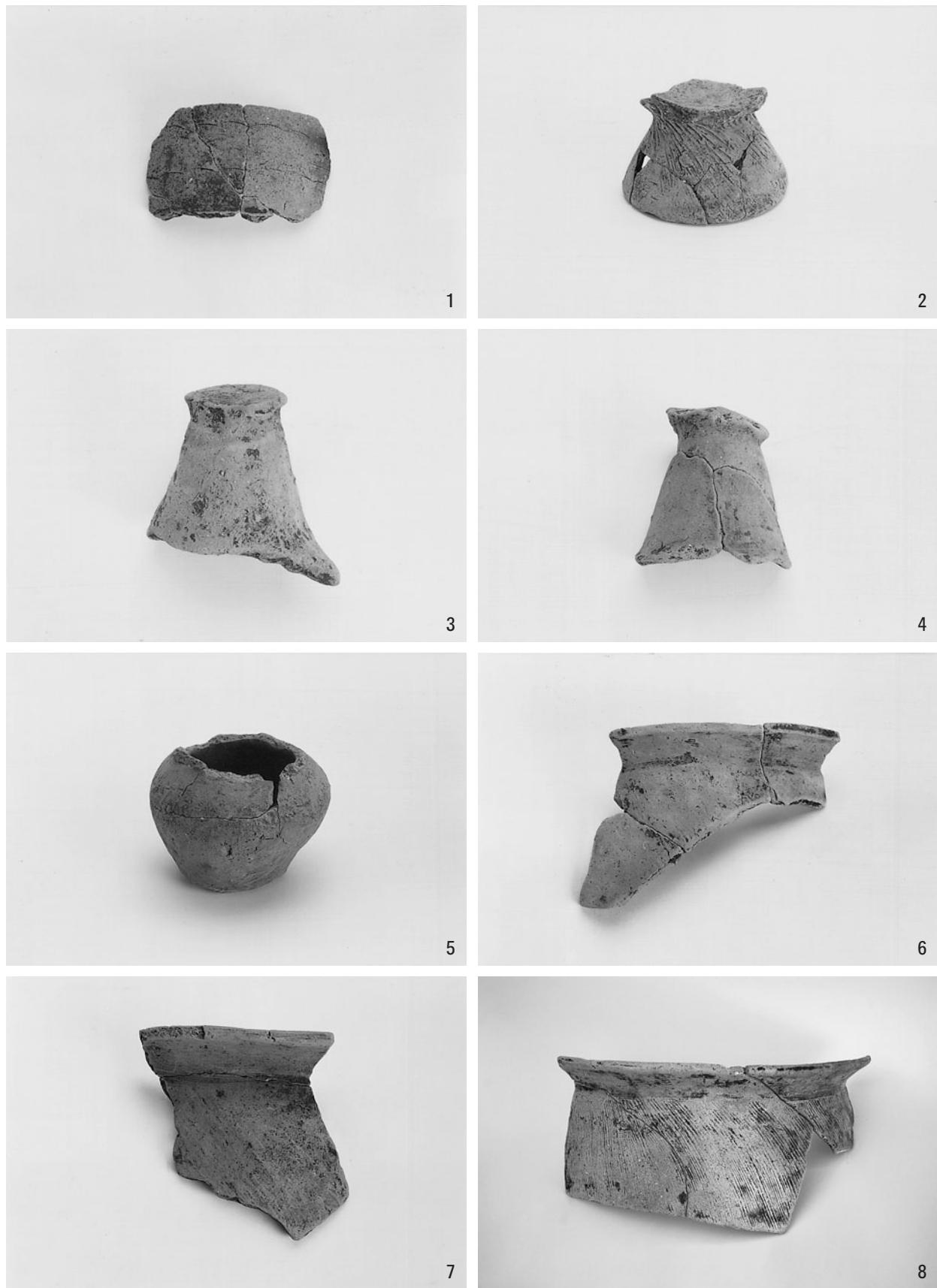


S K 23完掘状況（北東から）



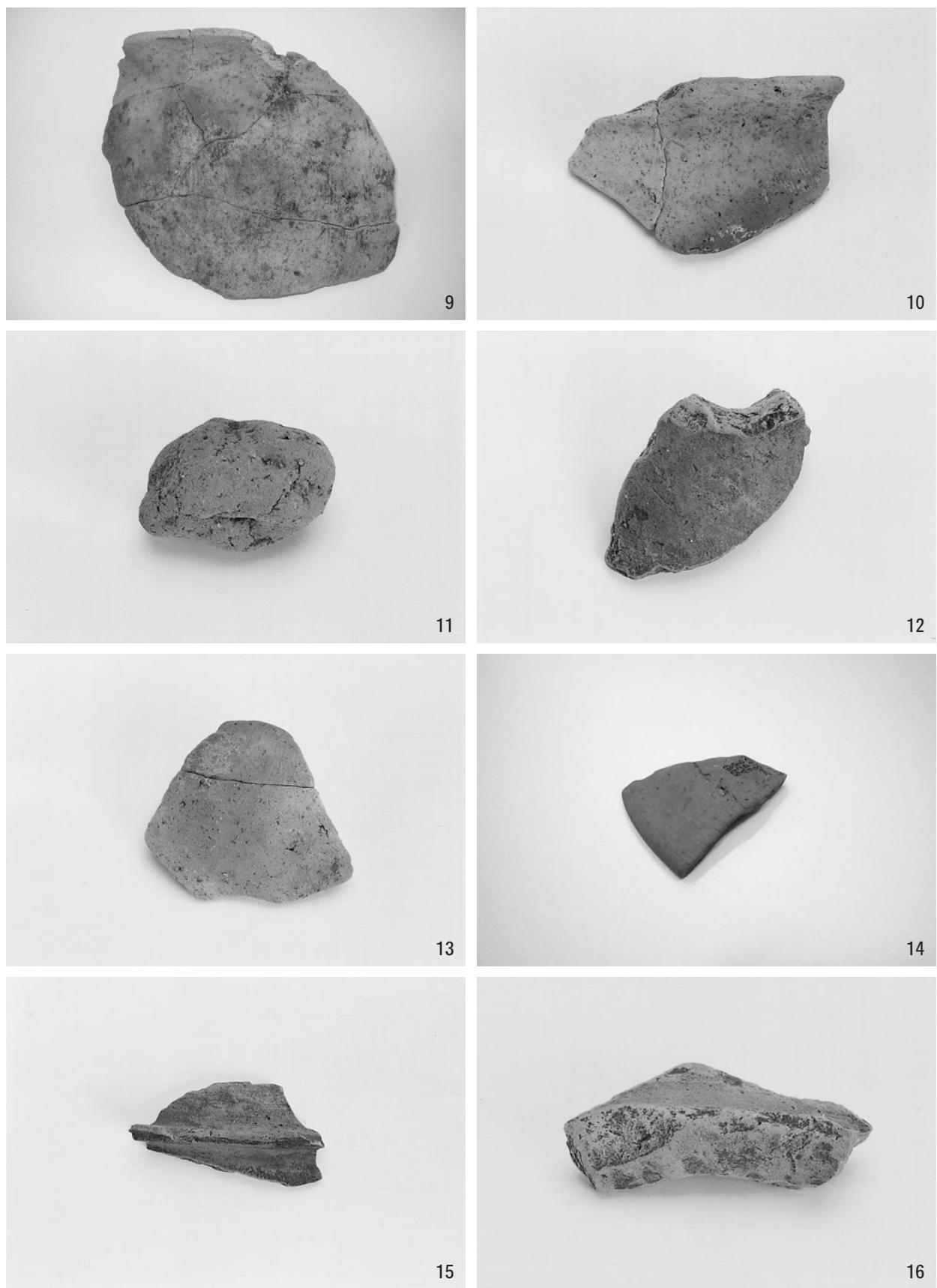
調査後の状況（東から）

写真図版14



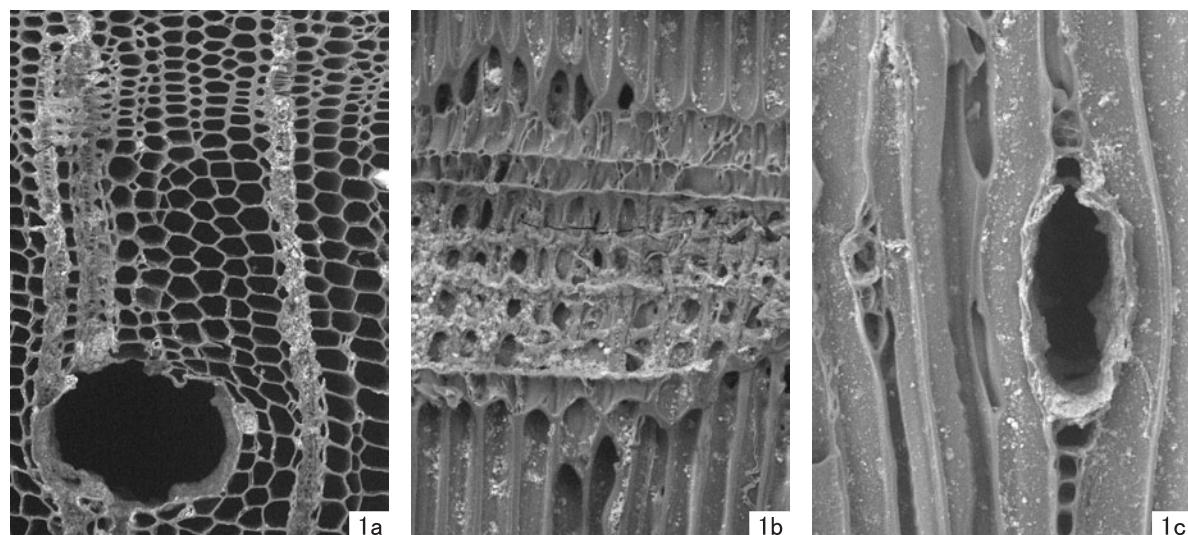
出土遺物 1

写真図版15



出土遺物 2

写真図版16



1. マツ属複維管束亜属(SK7;No.1)  
a:木口,b:柾目,c:板目

200  $\mu$  m:a  
100  $\mu$  m:b,c

炭化材

# 報告書抄録



三重県埋蔵文化財調査報告 314

岡田遺跡発掘調査報告

2010(平成22)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 光出版印刷株式会社